

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12802

研究課題名（和文）近世日本の俱舎学文献に対する基礎的研究：東京大学所蔵資料を中心に

研究課題名（英文）Fundamental study into early modern Japanese Kusha-gaku literature: with a focus on manuscripts and old woodblock printed texts in the University of Tokyo

研究代表者

一色 大悟 (Isshiki, Daigo)

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：20806567

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近現代仏教学の源流の一つとなった近世俱舎学にみられる、インド部派仏教の教理学書『俱舎論』科段（段落区分）に焦点をおき、複数の俱舎学文献の科段情報を人文情報学の手法を導入して分析することにより、それら諸文献の特性を析出する方法を吟味するものであった。本研究では、xmlのタグセットを用いた『俱舎論』科段の記述法を検討し、マークアップを行った。さらに複数の註釈書に記載された科段を比較することで、諸本における科段による構造化の特徴の一端を明らかにするとともに、近世仏教学における近代仏教学の萌芽を探求した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世日本の仏教教団においては仏教文献研究が高度に発達し、そこで現れた近代仏教学の萌芽は、ヨーロッパからインド学を導入する素地を形成した。しかしながら、その近世における仏教学の実態はほとんど解明されておらず、仏教学史上、そして世界哲学史上の意義についても詳らかでない。本研究が近世仏教学のなかでも中心的分野の一つである俱舎学に焦点をあわせ、その研究の基礎構築を試みたことは、仏教学がその研究の枠組みを批判するための足がかりとして、さらには東アジアの学知の一伝統を解明するための基礎としての意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the paragraphs (科段, kadan) that commentaries written in Japan in the early modern period attached to Abhidharmakosha (俱舎論, Kusha-ron), a doctrinal treatise of the early Buddhist sects in India and analyse the paragraph information in several commentaries using digital humanities methods in order to examine the way for analysing the characteristics of these commentaries. In this study, a method of describing the kadan of the Kusha-ron using the xml tag set was examined. Furthermore, by comparing the kadan in several commentaries, the study clarified some of the characteristics of structuring by kadan in various texts, and explored the emergence of modern Buddhist studies in early modern Buddhist studies.

研究分野：仏教学

キーワード：俱舎論 科段 アビダルマ 説一切有部 近世仏教学 近代仏教学

1. 研究開始当初の背景

インド仏教最大部派の一つであった説一切有部 Sarvāstivādin は、自派で伝承する阿含經典にもとづき、それを統合的に解釈しうる教理体系を構築しようとした。この教理構築運動は紀元後 5 世紀頃に完成期を迎え、ガンダーラ出身の学僧世親 Vasubandhu によって説一切有部を代表する教理書『阿毘達磨俱舍論 *Abhidharmakośabhāṣya*』(以下、『俱舍論』)が執筆された。『俱舍論』は、それ以後の仏教徒によって説一切有部の標準的な教理文献とみなされ、インドにおいて数々の注釈書が著された。『俱舍論』を学習する伝統は、『俱舍論』の漢訳・チベット語訳とともに東アジアおよびチベットにも移植され、当地の仏教の基礎的教養をなした。このような、いわゆる北伝仏教伝播地域において仏教教団において行われた『俱舍論』研究を、本研究では「俱舍学」と称する。

日本における俱舍学の伝統は上古の時代に始まり、南都の大寺院や三井寺などを中心として継続された。近世に至って、各宗派における檀林制度の確立を背景に俱舍学が隆盛し、数多くの学僧が輩出された。近世日本における俱舍学研究は古典研究として高度なレベルに達し、その成果は近現代以降の仏教学におけるインド部派仏教研究にも継承された。その影響力のほどは、『冠導阿毘達磨俱舍論』が仏訳された一事をもって十分伺うことができよう。『冠導阿毘達磨俱舍論』とは、真言宗泉山派の学僧佐伯旭雅が近世俱舍学の伝統を集大成して編纂した玄奘訳『俱舍論』の校注本であるが、近代に至ってベルギーの仏教学者 L. de La Vallée Poussin によって仏訳された。この仏訳は、後に発見された『俱舍論』サンスクリット本の校訂作業においても参照され、さらには英語へと二度重訳されながら現代も利用されている。

このように近世俱舍学の成果を継承したことで、日本はインド部派仏教研究における主軸の一つとなり、現代に至っている。しかしながら、とりわけ戦後にサンスクリット文献・チベット語文献が研究資料の中心となったのちに、日本の仏教学は、その源流の一つに近世俱舍学があることについて自覚的ではなくなり、近世俱舍学から継承された研究の枠組み・問題意識・概念体系などについて諸学者が主題的に論じることはほとんどなくなっていた。

しかしながら近年、たとえば R. Salomon 著 *The Buddhist Literature of Ancient Gandhāra* (Massachusetts: Wisdom Publication, 2018) に代表されるような中央アジア写本の研究のように、新出資料の発見と研究が相次いだ結果、インド部派仏教に対する既存の研究枠は見直しを迫られ続けている。日本の仏教学がこれらの新出資料にもとづく成果を加味して既存の成果を再定位し、その研究の枠組みを更新するためには、その前提となる学知に立ち返って自己を点検するという研究史批判を行い、問題設定や概念体系を組み立て直す必要がある。だが、近現代仏教学の源流の一つとなった近世俱舍学が注目されてこなかったために、その現存資料状況の把握、資料の分類といった基礎的研究も未着手な状態にあった。

2. 研究の目的

本研究は、近現代仏教学の源流の一つである近世俱舍学を参照可能なものとするべく、まず資料の研究史上の性格を大略的に分析する手法を考究することを目的とした。前節において近世の俱舍学が従来の研究において前景化していないことはすでに述べたが、それは同時に研究をすすめるために必要な手法そのものが整備されていないことを意味する。近世の俱舍学に関する研究は、舟橋水哉らが文献名とその著者を概略的に紹介している程度にとどまり、主要典籍の総数さえ明らかでない。これら各文献の性質は、最終的には個別に内容を精査することによって確定されるべきものではあるだろう。しかしながら俱舍学文献は、それらが扱った玄奘訳『俱舍論』が 30 巻に及ぶことから推測されるように、その多くが大冊であり、個々を精査するには膨大な時間を要する。したがって近世俱舍学文献の内容調査を効率的にすすめるためにも、各文献の性格を大まかに分析し、それをもって研究史上に位置づける手段がまず必要であることは明らかである。なお、この目的が、現在の日本における部派仏教研究が新たな地歩を築くための研究史批判を遠望するものであることは言うまでもない。

さらに附言すれば、本研究はその成果をもって近世仏教研究、さらには日本思想史分野に貢献することをも視野に収めていた。先述のように俱舍学は東アジア・チベットにおける仏教の基礎的教養をなしていた。本研究によって近世日本の俱舍学が解明されてゆくならば、同時代の仏教思想、とくに各宗派の檀林で行われていた教理学を研究する一助となりうる。また近世俱舍学という学知の系譜が明らかにされるならば、日本思想史あるいは日本哲学史分野などの分野にあらたな領域を拓くことが期待されるためである。

3. 研究の方法

本研究は、近世俱舍学文献の性質を大略的に分析するために、まずそれらが『俱舍論』に対して与える科段(段落区分)に注目した。『俱舍論』は、多くの古典的仏教文献と同様に段落分けなく記述されている。同書内では、著者である世親と想定反論者との間でしばしば問答が行われるが、その問答のどこで話者が交代するのかが『俱舍論』には明示されていない。したがって『俱舍論』を読解する際には、伝統的にも近現代の研究においても、段落を区切り、話者の交代を明示する作業が不可欠となる。このような科段と呼ばれる段落区分の情報は、註釈者の読解を直接

に跡付けるメタデータであり、『俱舎論』註釈書において一般的に記述されている。したがって科段情報をもとに、それを記述する俱舎学文献の註釈の特性をあぶり出すことが可能となると考えられるのである。

そこで俱舎学文献から科段を抽出し解析するための手法を吟味するため、本研究では『俱舎論』のなかでも第二章「分別根品」、とりわけ第4巻部分について『俱舎論』註釈書が附す科段を対象とし、標準的科段をデータベース化することで、標準からの偏差という形で近世俱舎学各文献の概略的性格を求めるという方法を用いた。同箇所は、想定反論者との議論が『俱舎論』のなかで最も激しく応酬される箇所であり、それゆえに濃密な科段情報が得られるため、サンプルとするにふさわしい。また標準的科段には、普光『俱舎論記』第二章「分別根品」のそれを用いた。同文献は、唐代に玄奘門下で著されたものではあるが、以後の俱舎学者にとって必須の参考書となっていたために、標準的科段足りうとえられる。

普光『俱舎論記』の科段情報をデータベース化するにあたっては、SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース (<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>) で公開されているテキストデータを活用し、人文情報学で広く利用されているマークアップ言語 XML の、国際標準である TEI ガイドラインに準拠したタグを用いてマークアップした。

同時に、この標準的科段と比較する文献を選定するため、東京大学所蔵本を中心として近世俱舎学文献の科段を吟味した。研究開始当初においてはそれぞれの所蔵機関に赴いて閲覧調査することを計画していたものの、コロナ禍によって訪問調査が困難となった。そこで目録等の情報をもとに諸本の複写を取寄せることで対処した。

4. 研究成果

本研究の成果は、大別して以下の3点である。

第一に、本研究において科段比較の対象とする近世日本の俱舎学文献を調査選定したことの副次的成果として、日本の大学等の機関に所蔵される資料の現状確認を進めることができた。東京大学で現時点までに所蔵が確認された俱舎学文献の全体を現物で確認したほか、京都大学・東北大学・東洋大学・佛教学・龍谷大学・大正大学・国文学研究資料館・香川大学・国立民族学博物館からの複写取寄24点、京都大学貴重資料デジタルアーカイブ・国文学研究資料館電子資料館・国立国会図書館デジタルコレクション・龍谷大学図書館貴重資料画像データベース「龍谷蔵」・東海学園大学哲誠文庫閲覧システムといったオンラインアーカイブにおける重要資料の所在を確認しえた。本研究による俱舎学資料に焦点をあわせた所蔵調査は、管見によれば20世紀前半の舟橋水哉による調査以後に初めて行われたものである。これにより本研究は、舟橋の成果を一部更新するとともに、今後の日本俱舎学史研究、そして仏教学史批判にむけた足がかりを築きえた。ただし本研究は科段のサンプルとなる文献を収集することに主眼があり、研究予算の制約もあったため、上記の諸機関の OPAC・目録にみえる俱舎学文献の悉皆調査、および他機関・寺院所蔵資料の調査は今後の課題として残された。

第二に、人文情報学上の成果として、上記の資料調査のもとづき7文献の『俱舎論』根品第4巻から科段をピックアップし、エクセル上にデータベース化した。それとともに xml を用いた科段マークアップのタグセットについて検討した結果、小谷昂久氏(東京大学大学院博士課程)らと開催した研究会の知見をもとに、TEI P5 ガイドラインに依拠した<standOff>タグを使用する方法を導入するとともに、このマークアップ手法に関する成果を共著論文にまとめた。また、法宝『俱舎論疏』第4巻および普光『俱舎論記』同巻の科段マークアップ作業を行った。

第三に、仏教学上の成果として、上記の科段マークアップ作業と蓄積した情報を比較する過程から、俱舎学書が『俱舎論』を構造化する際に見られる思想の相違についていくつかの特徴を明らかにした。令和3年度には、『俱舎論』根品を位置づける上位科段について普光『俱舎論記』や近世日本の俱舎学文献を比較し、江戸後期の学僧である快道が『俱舎論』のテキスト構造について立てた楽説「破我別論」の背景には、註釈者に対して特権化された著者という概念が込められており、それが近代的俱舎論読解の萌芽の一つであることを明らかにした。この研究により、本研究代表者に対し第64回日本印度学仏教学会賞(第249号)が授与された。さらに令和4年度には、俱舎学文献が『俱舎論』全体に付与した科段構造に接合されない、副科段ともいべき科段構造の扱いに諸本の読解の特色があることを確認した。副科段構造の存在については、副科段構造の存在について先述した小谷氏との共著論文において報告されたが、その文献ごとの差異が示す特徴については、今後の検討課題として残された。

さらに本研究にかかる文献調査から、近世俱舎学から近代仏教学へとつづく学知の継承の一端を解明しえた。令和2年度には近代仏教学の部派仏教研究の背景として、近世俱舎学における部派概念の変遷を論じるとともに、近世俱舎学において準備された釈迦牟尼仏の根源的仏教に対する関心が、近代仏教学の形成に関わっていることについて発表した。令和4年度には、『俱舎論』根品を主な典拠とする五位七十五法というカテゴリー論の系譜、および存在論の系譜を唐代の中国から現代日本まで辿り、特に日本における関心の変遷と近代化の意義について論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 一色大悟	4. 巻 70(2)
2. 論文標題 東アジアの諸註釈が論じる『俱舎論』の全体構成－三分分別から破我別論へ－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 975-970
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.70.2_975	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 一色大悟	4. 巻 4
2. 論文標題 存在論のもう一つの系譜 説一切有部・衆賢・体滅用滅論争	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 未来哲学	6. 最初と最後の頁 137-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小谷昂久・一色大悟・左藤仁宏・永崎研宣	4. 巻 4
2. 論文標題 玄奘訳『俱舎論』注釈書における科段の構造化について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 対法雑誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 一色大悟
2. 発表標題 東アジアの諸註釈が論じる『俱舎論』の全体構成－三分分別から破我別論へ－
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第72回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 一色大悟
2. 発表標題 近世日本のアビダルマ研究におけるインド仏教史認識 部派観の変遷を中心として
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第71回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Daigo Isshiki
2. 発表標題 Acceptance of the Abhidharmakosa in Japan: Focusing on the Relationship with Buddhist Studies in Modern Era
3. 学会等名 The 4th Biannual International Conference of the Group of 4 Universities in East Asia on Buddhist Studies "East Asia as a Method of Research" (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 一色大悟
2. 発表標題 五位七十五法研究史
3. 学会等名 第66回国際東方学会議 (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------